

子どもの創造的表現活動*

— 保育者の音楽的アプローチによる子どもの即興的身体表現活動 —

井 中 あけみ
高 橋 うらら**

I. はじめに

本研究は、子どもたちの音楽と身体の間を通じた表現活動から、主体性を育むための保育の活動方法を探求していくものである。

筆者はこれまで『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園・教育保育要領』の5領域にある「表現」について、子どもの未分化な発達段階での「自分なりの豊かな表現」を引き出していくことのできる表現活動についての調査を実践してきた。特に2018年に「幼児期の終わりまでに育ちが期待される10の姿」¹⁾が施行されて以来、子どもの主体性を育む保育の中で、主体的な音楽活動、身体活動についての新たな表現あそびを発掘していくことに重点を置いて研究調査を続けている。

これまでの子どもたちの身体表現活動では、童謡曲などの歌詞を使用した「手遊び」「動物まねっこ」、視覚による既成的動きや指導者の言葉によって動きを真似る等、既に振り付けられている子どもたちが取り組みやすい題材が取り上げられてきたといえよう。多胡は²⁾、保育現場においてそれらを扱う身体表現活動が、「音楽の下位に位置づけられるものと捉えられるなど」と述べており、今後は身体表現あそびの多様な表現の実践を目指していくことが必要であることを示している。

これらに関連して、筆者はこれまでの研究調査において、音楽的側面からの表現についても、これと同様のことを問題提起してきた。例えば「歌唱」「合奏」「鼓笛隊」等の技術を必要とする既成的作品や、指導者の指示を優先とした視覚的な学びなどによる演奏活動が保育現場の主な活動であったことなどである。またそれがこれまで、幼児期の音楽活動の主として位置付けられてきたことから、保育者にとっては、「音楽」による「主体的表現活動」への取り組みに戸惑いを感じることは当然のことと考えられる。特にこれら身体表現と音楽表現の子どもの表現力については、技術に重点を置いた発表の場での見栄えや出来栄を評価するということが、結果となることも否めない。

※ 2022年5月14(土)・15日(日)の第75回「日本保育学会」でポスター発表を行った「創造的表現活動の実践について (2) —保育者の音楽的アプローチは子どもの創造的身体表現を引き出すか—」のデータを基に加筆を行ったものである。

※※東京都市大学 人間科学部 児童教育科 准教授

1) 「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2018年4月より施行

2) 多胡綾花著「幼稚園における身体表現遊びの実践内容について—保育歴による違いから—」

『湖北短期大学研究紀要 第33号』2012年 p.21.

桐原³⁾は、身体表現活動について、社会性や文化的認識および表現のコンピテンシー育成について深く関わっていること、「音楽活動における対話や協働」「自らの身体の動きや感情の認識」「世界の多様な舞踊にふれることによる多様性の認識」などのねらいがある」ことを述べている。これらのことは、金光⁴⁾も、身体や音楽実践の社会性に注目する研究を取り上げており、「音楽」の批判的再検討は、音楽科の音楽観をも揺さぶるだろう。それは「身体表現」を身体から音楽へのアプローチという点で再評価する裏付けとなり、同時に「身体表現」の可能性をあらたに見出す足がかりともなるだろう。」としている。さらに金光は、「身体表現はむしろ幼児教育の分野が主流といってよい。」と述べており、現段階では幼児期以降の学校指導事例について、音楽科の身体表現への活動は、「低学年を前提」にあることを指摘している⁵⁾。

このことから、今後、主体性や多様性などを重んじた社会の中で、人間個々の表現の内容を充実させていくためには、幼児教育から小学校・中学校での指導への関連を深めていくことも重要であり、その初期段階としての幼児期の音楽と身体表現活動の必要性を明確にするために、この研究をさらに進めていきたいと考えている。これまでの筆者の調査からも、音楽と身体に関連した表現活動を発展させていくことは、子ども同士、子どもと保育者の「コミュニケーション」の発展に繋がる部分をいくつか発見できており、具体的な表現活動が提示できるよう調査をすすめていくことは、今後の保育活動や子どもたちの成長に役立つものと考えられる。

これらのことを含め、主体性を重んじた表現活動を実践していく幼児教育の分野において、身体表現と音楽表現の活動は、子どもたちの成長過程において文化・社会を理解していくことに大きく関与すると思われ、小学校以降の教科を分化していく以前であるからこそ実践できる表現活動を実践すべきであろう。山田⁶⁾は、「音の響きと身体との関りかたについての理論的な考察を「音響身体論」と名づけており、「音響的身体とは、音がそこに反響する場としての身体であり、音によって惹きおこされるさまざまな感覚をつなぐ身体であり、また、響きを生みだすものと受け取るもの、響きを生みだすもの同士、そして響きを受け取るもの同士のあいだに、特別な一体感やつながりを生じる身体をさしている。」と音について身体の影響を指している。これら身体と音楽についての関係性を基盤として、これまで筆者は研究調査を継続してきたが、その中でも課題として取り上げたことは、保育者自身について、主体性に繋がっていく表現活動への取り組みを体験し理解することから、多様性のある子どもたちの音楽・身体表現への感知力を養っていくことである。

これまでの調査では、子どもたちの「音楽（音）をきっかけ」とした身体による自発的活動に対し、保育者たちからは、その実践の「必要性を感じられない」という発言や反発的な

3) 桐原 礼著「身体の動きを伴った音楽表現づくりにおける学びについて」『信州大学教育学部付属次世代型研究開発センター紀要No.18』2019年, p.120.

4) 金光真理子著「音楽科における「身体表現」の再考:「音楽」と「身体表現」の関係性」『横浜国立大学教育学部紀要. I. 教育科学』2018年, p.3.

5) 金光真理子著「音楽科における「身体表現」の再考:「音楽」と「身体表現」の関係性」『横浜国立大学教育学部紀要. I. 教育科学』2018年, p.1.

6) 山田陽一著『響きあう身体—音楽・グルーブ・憑依』春秋社, 2017年, p.245.

コメントが多く寄せられたことが、大きな課題となっている。そこで、保育者に対して、子どもたちの主体性を重んじた身体や音楽の自発的表現活動への理解を求めするため、保育者自身が自発的表現活動を経験することへの調査・研究に着手してきた。今回は、それら保育者への調査に引き続き、前回の調査で行った保育者同士による即興的音楽表現活動からの新たな気づきを活用し、「保育者と子どもたちによる即興的表現活動」を実践することから、子どもたちのどのような自発的表現を引き出ししていくのか、またそれぞれの子どもたちの多様の表現に対する新たな保育者の気づきについてなど、子どもたちの表現への感受について検証していくこととする。

II. 研究目的

近年非認知能力について注目されるようになり、幼児期の発達を促す環境や保育者の関わり方が「非認知能力」への育みに与える影響については、多くの研究者達によつての調査研究も実践されている。また、その中の研究では、「感性・表現力」が取り上げられ、各時期に大切にしたい体験について、「思い切り体を動かす」「自分なりの表現を楽しむ」「多様な感情体験をする」「動作や絵など多様な表現をする」などの項目が挙げられている⁷⁾。

これらの項目と同様に、子どもの主体性を育むことについても、音楽や身体における表現活動は、子どもたちが自ら考えた表現を自由に表現したり、人と関わりながら組み立てられていく協働的表現をしたりなど、様々な方向性を持つての豊かな表現力の育成が期待できるものとする。またそこでは、保育者の考え方や環境設定が、子どもたちの活動に直接的に関わるものであり、保育者が考える子どもたちの音楽や身体への主体的表現活動への気づきや理解が必要不可欠なものといえるであろう。これまで音楽や身体における活動は、「リズム教育」などの専門家の指導によるものを活用している現場は多くある。しかし、保育者自らが、子どもたちの自発的活動を理解するためには、保育者自身の自発的表現を経験することが前提であるとする。

筆者は、これまで保育における自発的表現活動調査で、保育者が子どもたちの自発的表現活動実践への更なる理解と、子どもたちの表現への気づきを高めていくため、保育者同士による「音楽（音）をきっかけ」とした身体表現活動の実践・調査を数回に渡り行ってきた。さらに前回は、「演奏する」という自発的表現活動を初めて実践した。そこでは、音楽表現に対し、技術的レベル（作曲技術や演奏技術）を優先するというイメージを持つ保育者の既成概念を払拭するということを含め、保育者同士による簡易楽器での自由な演奏を行う「即興的音楽表現活動」を行った。また、この即興的な演奏による自発的表現については、初めて経験するという保育者が殆どであったため、2回実践する即興的演奏の合間（1回目と2回目の間）に、ファシリテーターと共に活動する即興的身体表現活動を取り入れての即興的演奏を行った。その結果、「自発的表現の身体と音楽の関連性があることを感じ、1回目の演奏後に活動した身体の動きが、2回目の即興的演奏に対して自然と音に応用できた」という保育者の感想がいくつか採取できている。さらに、保育者同士の即興的演奏では、音を介

7) 文部科学省『幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究』文部科学省、2016年、p.22

した保育者同士のコミュニケーションが自然に発生したこと、技術面の不安を感じることなく自分なりの演奏で表現することができ、他の保育者と共有しながらの演奏ができた達成感の感想を、いくつか入手できたのである。

そこで今回は、前回は「創造的表現活動の実践について—保育者による音楽と身体在即興的表現活動から—」⁸⁾の調査結果を活用し、保育者の即興的音楽表現のアプローチによる、子どもたちの即興的身体表現活動を実践することとした。そして本調査は、保育者がその子どもたちの自発的身体表現をいかに捉えるのか、また相互作用的表現が見出せるのか、さらにそこから共有できるもの、伝え合うもの等についての保育者の新たな気づきに重点を置き、主体性を育てていくための子どもの表現活動方法の発展に繋げていくことを目指していく。

Ⅲ. 調査について

これまでの自発的表現活動調査における保育者のアンケート記録からは、身体と音楽の即興的表現活動において、自発的な身体や音楽の表現活動には、保育者自身が調査の実践の過程で不安や戸惑いを感じるという事実が幾度（毎回の調査毎）か発見されている。

例：（保育者のアンケートの記録からの抜粋）

- ①子どもたちの自由な音楽や身体表現は、統一感がなくなることに不安を感じる
- ②自由な活動をすることへの正解がなんであるのか回答がないため、実践することに抵抗がある
- ③主体性のある音楽や身体活動について理解できず、既成的な動きや演奏を行うことは安心できる
- ④自発的な演奏や身体活動は、技術的にレベルの高さが必要であり、自発的表現はそれぞれの分野の専門家に限られる活動ではないかと思ってしまう（特にダンスやピアノを苦手とするため）

これらの観点は、保育者自身の学習過程が、音楽ではピアノ演奏技術の学び、身体表現では曲への振り付けてあるものを技術的に再現するなど、既成的な学びを基本としてきたことが多いと考えられる。またそれは、専門性への基礎的な学びを獲得していくには必要不可欠なものであることも否めないであろう。しかしながら、近年保育者養成校では、ピアノ未経験入学者増加の傾向⁹⁾に伴い、技術習得の低下がみられるようになっているなどの例が多数ある。そのため保育者の技術力を主とした表現活動だけでは、子どもたちの身体や音楽の創造的、主体的表現活動は期待できないものと考えられる。

そこで今回の取り組みについては、保育者が身体や音楽の自発的表現活動に対して難色を示すという傾向にあることを踏まえて、これまでの表現活動の既成概念から離れ、保育者自身が自由な表現をすることから、子どもたちの主体的活動に対して、新たな活動を探知する調査となればと考える。

8) 第74回「日本保育学会保育学会ポスター発表」『創造的表現活動の実践について—保育者による音楽と身体在即興的表現活動から—』

9) 吉村淳子・芝崎美和著「保育者養成校におけるピアノ指導について—学生の自己効力感に着目して—」『新見公立大学紀要 第36巻』2015年, p.59.

Ⅲ-1. 調査の概要

本調査は、前回の研究調査¹⁰⁾で実践した「簡易楽器による即興的音楽表現」を活用し、保育者同士による自発的な音楽表現活動から子どもたちへの即興的演奏を実施し、子どもたちがその保育者たちの即興的演奏に対して自由に活動する「子どもたちの即興的身体表現活動」を実践することとした。これらは、保育者が実際に子どもに関わる表現活動を通して、そこから見えてくる子どもたちの自発的活動パターンや、「保育者の即興的演奏と子どもの即興的身体表現」との表現の関連性から、保育者の気づきを見出していく調査となっている。

今年度(2022年)は、引き続きコロナ禍につき、この調査については、筆者の直接の訪問調査を中止し、前回の即興的身体表現と即興的音楽表現の調査経験¹¹⁾を基盤として、紙面による説明と園長先生・副園長先生への口頭説明(リモート)で、保育者への調査依頼を行った。

Ⅲ-2. 倫理的配慮

調査対象園については、事前に、園や保育者個人、子どもたち個人が特定されないような分析をすることで許可を得ている。またビデオ撮影(身体・音楽)による記録は氏名を公開しないこと、事後の保育者の「アンケートによる実践記録」を実名で公開しないことにも承諾を得ている。それらを十分配慮することにより、今後の保育活動内容の発展に活用していくことへの説明を行い、理解を得ることができている。

Ⅲ-3. 日程と対象者

①調査日: 2022年2月25日 場所: 静岡県J幼稚園 多目的室又は保育室

②対象者:

幼稚園児252名 [三歳児3クラス82名], [四歳児3クラス79名], [五歳児3クラス91名]
保育者 [各クラス担任9名]

Ⅲ-4. 子どもの活動について

今回の調査の子どもたちの活動については、最初に活動のためのウォーミングアップとして、ファシリテーター(担任保育者)と一緒に、身体による自由な動きを行う。その後保育者たちからの即興的音楽表現による子どもたち同士の自由な身体表現活動を実践した。これらの子どもたちの活動については、各クラスにおいて、携帯撮影・ビデオ撮影の二つで記録されている(他の職員の補助によるもの)。さらに、事後には、子どもたち自らの発言が聴取されており、さらに詳細な子どもの活動内容がアンケート用紙に記載されている。

<子どものクラス人数・対象年齢について>

[三歳児3クラス]

Aクラス(男13名, 女14名), Bクラス(男12名, 女16名),

Cクラス(男11名, 女16名)

10) 第74回「日本保育学会保育学会ポスター発表」 「創造的表現活動の実践について—保育者による音楽と身体の即興的表現活動から—」

11) 第74回「日本保育学会保育学会ポスター発表」 「創造的表現活動の実践について—保育者による音楽と身体の即興的表現活動から—」

[四歳児3クラス]

Aクラス（男13名，女16名），Bクラス（男11名，女15名），
Cクラス（男11名，女13名）

[五歳児3クラス]

Aクラス（男15名，女16名），Bクラス（男13名，女16名），
Cクラス（男14名，女17名）

Ⅲ－5. 「保育者の活動について」

保育者の活動については，子どもたちの自発的身体表現活動を実践するため，最初にファシリテーターとして，動きを子どもたちと共有しながら，自由な身体表現活動を子どもたちと行う。その後，子どもたちの表現活動に関わりを持っていくため，保育者の簡易楽器による即興的音楽表現活動を実践する。さらに事後の保育者へのアンケート調査では，自分の即興的演奏への感じ方や変化，発見について検知していくと共に，保育者たちからの子どもへの気づき，子どもたちの自発的表現活動の必要性に対する考え方を調査していくものである。

<対象の保育者数と調査への参加回数について>

（カッコ内の数はこれまでの調査への参加回数）

[三歳児3クラス]

Aクラス（0回），Bクラス（0回），Cクラス（3回） 計3名

[四歳児3クラス]

Aクラス（3回），Bクラス（0回），Cクラス（2回） 計3名

[五歳児3クラス]

Aクラス（3回），Bクラス（3回），Cクラス（3回） 計3名

Ⅲ－6. 保育者の活動までの準備と流れについて

事前に年齢毎のクラス担任全員で即興的演奏の簡単な打ち合わせと曲のテーマ，イメージを決める。打ち合わせによる使用楽器などの練習はあるが，全員での技術的合奏演奏の練習はしない。

活動前に子どもたちと保育者が身体のウォーミングアップを行うため，クラス毎での身体表現実践方法について，各担任が身体の動きを自由に創作しておくこととした（各保育者自身で考える動き）。その後，保育者による子どもたちへの即興的演奏を1分前後行い，子どもたちにはテーマを伝えずに自由に動いてもらう（同じことをクラス毎で3回実践）。それらを録画した映像に基づき，事後にその映像を確認しながら，担任保育者はそのクラスの活動の記録をアンケート用紙に記述する。

Ⅲ－6－1. 調査前の保育者の即興的演奏への準備内容

[テーマ]

3名の保育者全員（3クラスの担任全員＝各年齢担任で1グループとする）で，即興的演奏のテーマと演奏概要をディスカッションする（子どもたちには公表はしない）。

[使用楽器の種類]（グループ毎の保育者たちで以下を自由に選択する）

・ピアノ（旋律的な演奏はしない）・スネアドラム・マリimba・マラカス・大太鼓・鈴・シンバル・ウッドブロック・ウインドバーチャイム・すず・タンブリン・トライアングル・グロッケン・木琴

[※即興的演奏のポイント] (特に意識して演奏に取り入れるポイントについて)

①音色②リズム③速度の変化④強弱⑤音の重なり(重量)⑥音の重なり(濃淡)⑦他者との演奏の絡まり⑧反復した演奏⑨縦と横(音のアクセントやレガートが交互にあったり、混じったりする)⑩途中で曲のイメージが変化

[子どもたちと保育者による身体表現のウォーミングアップについて]

前回調査の保育者たちの「即興的音楽表現活動」のアンケートについては、「身体表現活動(身体のみ動き)」を即興的演奏の合間に取り入れたことで、「音楽(音)による自由な表現活動」への違和感がなくなっていくことが証言されていた。そこで今回も、子どもたちにこの身体的なウォーミングアップを実施することとした。そして今回は、保育者自身が、自分たちの即興的演奏のテーマに必要であると考えられる「動き」をウォーミングアップに取り入れ、子どもたちと共有しながら身体表現を行うというものである。

[演奏時間] 60秒前後

Ⅲ-6-2. 各年齢の担任保育者による即興的演奏内容について

[3歳児]

| | |
|-----------------------------|--|
| テーマ | 雨降り |
| 使用楽器 | ・グロッケン・スネアドラム・シンバル・大太鼓 ・ウインドバーチャイム・タンブリン・マラカス |
| 即興演奏を行う際に意識して行ったものの番号 {※前述} | ※即興的演奏のポイント番号 ①②③④⑥⑩ |

[4歳児]

| | |
|------------------------------|---|
| テーマ | お花の一生 |
| 使用楽器 | ・グロッケン・スネアドラム・シンバル・大太鼓・すず ・ウインドバーチャイム・ピアノ・タンブリン・マラカス |
| 即興的演奏を行う際に意識して行ったものの番号 {※前述} | ※即興的演奏のポイント番号 ①②③④⑥⑦⑧⑩ |

[5歳児]

| | |
|-----------------------------|--|
| テーマ | 天気の変化 |
| 使用楽器 | ・グロッケン・スネアドラム・シンバル・大太鼓・木琴 ・マラカス・ウッドブロック・ウインドバーチャイム・すず |
| 即興演奏を行う際に意識して行ったものの番号 {※前述} | ※即興的演奏のポイント番号 ②③④⑥⑧⑨⑩ |

IV. 調査結果について

調査結果については、ビデオ・携帯の撮影記録を観察しながらの保育者のアンケート記述（保育者の感想や子どもたちから採取した言葉）によるものと、調査人によるビデオ記録の観察による「音と身体の動きの関連性」を基とした分析によるものとした。

IV-1. 保育者のアンケート記述について

以下は各年齢の担任保育者たちが、自分たちの即興的演奏による子どもの身体活動の様子について、アンケートでの自由記述をまとめたものである。

[三歳児担当保育者による自由記述]（重複する内容は一名の記載をする）

| | |
|--|--|
| ウォーミングアップでの、子どもたちの自発的動きについて | <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の言葉掛けですぐに動き始めた子が殆どだった。 ・動かずにじっとしていた子もいたが、友達の動きをじっと見るなどしていた。 ・保育者たちが、ゆっくり・早く・寝転ぶ・転がるなどを言うことで、積極的に動いていた。 ・教員を見るのではなく、子ども同士が顔を見合わせて、楽しそうに共感している姿を確認した。 |
| 保育者の即興的演奏について感じたこと | <ul style="list-style-type: none"> ・各楽器を連打すると、子どもたちはそれぞれの動きを活発に行うことに繋がった。 ・盛り上がりを強調するために、前後の音量を加減することが必要と感じた。 |
| 即興的演奏に取り入れた、演奏のポイント（①から⑩）について、子どもの表現に感じたこと | <ul style="list-style-type: none"> ・①について、音色から優しさを表現していた。 ・③について速度アップすると慌ただしい動きをしていた。 ・④について音が強くなると、「キヤー」と声をあげる子たちもいた、弱くなると、不安を表現していた。 ・⑥について恐怖心で耳をふさいだり、身体を縮めたりしていた。 ・⑩について強い音では恐怖、速いリズムでは興奮状態を表現していた。 |

| | |
|------------------------------|--|
| <p>全体的な子どもたちの動きについて感じたこと</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもそれぞれの性格の違いによって、一回目は、保育者を見るなど動けない子がいたが、周りの様子に影響を受け、二回目はそれを真似るようになり、三回目は自分の動きとして、表現していた子がいた。 ・グループというものを作っている子たちは、その子たちでの動きというものを表現していて、それがグループ毎の表現にも繋がっていった。 ・ア. 普段は、低音や大きな音を怖がり、教師のそばに身を寄せている子（aちゃん）であるが、今回は立ち尽くした後、他児と同様に動き出し、自分を身体でその思いを表現できていた。 ・連打の演奏をしたが、子どもたちは一回目に回遊魚のように回りだしていたが、二回目三回目となって人と交差したりなど、自分を表現していくことに、自信を持ち始めていくようなイメージを持った。 ・音によって自分の心情を表現する子どもたちを感じた。以下は子どもの声を聴取したもの。 bちゃん「うるさい音から逃げようとした」 cちゃん「橋を渡っていたんだけど、ジャンプして海に落ちた！」 ・保育者の演奏が弱さや終止を表現していくと、子どもたちは楽器の方を見つめ、動きもおさまりを見せていた。つまり音をしっかりと聞いていて、それを自分の体で表現しようとしているのだと感じた。 ・イ. 回数を重ねると、子どもの動きが自分なりに変化していくことが興味深かった。それに影響したのか、「もっとやりたい！」という子どもの声も多く聞かれた。 ・私の私的な感覚かもしれないが、三歳児は友達の動きに合わせて動くことよりも、自分を感じたままに身体を動かしていることの方が多いのではないかと感じた。 |
|------------------------------|--|

[四歳児担当保育者による自由記述] (重複する内容は一名の記載をする)

| | |
|--|--|
| ウォーミングアップでの、子どもたちの自発的動きについて | <ul style="list-style-type: none"> ・ウォーミングアップでは、身体をねじる、回る、跳ぶなど様々な動きを取り入れたら、子どもたち全体が広がりを見せ、楽しい雰囲気醸し出していった。 ・自発的な動きと思ったのは、保育者が「ジャンプ!」と言ったら、友達と向き合い手を繋いでジャンプしたり、両手を広げて踊るようなジャンプをしたり、自由な動きをしていた。 ・「友達とくっついてみよう」「はなれてみよう」などの声掛けから、それぞれの関わり方ですぐに動く子と迷いがあり動けなくなってしまう子もいた。 ・友達とくっつく、離れるなどの相手がいる動作では、動きにプラスしてお互いの目線が合い、共有しているといった思いが加わり、とても充実している様子が見受けられた。 |
| 保育者の即興的演奏について感じたこと | <ul style="list-style-type: none"> ・演奏で伝わったことは、暗い部分と明るい部分で子どもの動きが変化していたこと、大きさ速さを変えたことで、子どもの変化がわかりやすく、色々な楽器で保育者が表現できたことから子どもの表現の変化も受け止めることができた。 ・即興演奏には不安があったが、保育者同士でテーマを考え、イメージを自由に自分の考えを提案するなど話し合うことができたことで演奏でも自由さや楽しさを表現できたと感じた。 |
| 即興的演奏に取り入れた、演奏のポイント (①から⑩) について、子どもの表現に感じたこと | <ul style="list-style-type: none"> ① やわらかい音⇒花に水をあげるように動いていた。 ② スタッカートのように弾むリズム ⇒身体をはずませて、はちのイメージが感じられた。 ③ 速い音⇒ホールいっぱい走り回り、芽が伸びるような動きがあった。 ④ 大きい音⇒風が吹いている様子、 小さい音⇒光が見えている様子などを感じられた。 ⑦ きれいなゆったりとした音色⇒友達とくっついたり、両手を繋いだりと、互いにやり取りをしていた。一緒に花が咲く表現もみられた。 ⑧ スネアドラムの「トン」という音 ⇒「グーパーグーパー」を繰り返し、伸びたり縮んだりの動きがあった。 |

| | |
|------------------------------|--|
| <p>全体的な子どもたちの動きについて感じたこと</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・一回目は、何事かという違和感で動ける子が少なかった。二回目からは動き出す子を見て、つられていく様子が見られた。 ・一回目の保育者の演奏はステージ上で行っていたため、それをじっと観察する子どもがいた。異様な雰囲気と思えることもあったため、二回目は、ウ. 子どもたちと同じフロアに降りて演奏を行った。すると、子どもたちは同じ場所で共有しながら活動に取り組み始めた。「どこで演奏するか」ということも、子どもたちの気持ちに作用することを発見した。 ・通常は、この年齢は週一回リトミック活動を実施している。エ. その際の活動を改めて意識すると、動きが決まっていること、保育者の真似をすることが確定していることを認識した。それを考えると、動けない子どももいたが、動いている子どもは自由に動くというものに対して、伸び伸びと行うことができるものであるということを知った。 ・事後、子どもたちが、どんな音を感じたのかを自ら話してくれた。ドン、キラキラ、ジャーン、ポンポン、シャンシャンなど、様々な音の表現をしてくれた。それぞれの音のイメージを、身体を通して感じてくれたことが確認できた。 ・子どもたちは音楽を聴いて自由に活動するなどといった経験はなく、普段と違ったそれぞれの子どもの様子を知ることができた。オ. 一斉に活動するときは、積極的に確実に動きを行い、既成の共通した動きや演奏に対しては表現できる子どもなのに、恥ずかしさで動けない、戸惑いがあつて動けないなどの状態となっていた例もあった。 |
|------------------------------|--|

[五歳児担当保育者による自由記述] (重複する内容は一名の記載をする)

| | |
|--|--|
| ウォーミングアップでの、子どもたちの自発的動きについて | <ul style="list-style-type: none"> ・周囲を気にしながら始めていたが、友達近くに行き一緒になると動いたりなどの姿などがみられた。 ・保育者からの言葉や説明は殆んどないため、保育者や友達の姿を見ながら自分なりの動きが徐々に表れていった。 ・タンブリンとパペットを使用し動きを見せ、身体の進む方向やジャンプなどを示した。その際子どもたちの集中力がみられた。 ・徐々に動きを見て反応するのではなく、音だけで自由に動いている子どももいた。 |
| 保育者の即興的演奏について感じたこと | <ul style="list-style-type: none"> ・保育者同士で、テーマによって、演奏の変化や特徴について、おおよそを想定していたので、演奏に違和感はなかった。 ・カ. 保育者同士が演奏をはじめたら、保育者全員が共通理解しているということが自覚でき、周りの音を聴きながら互いにイメージを感じ取りながら演奏が出来た。 ・「晴」「雷」は子どもに伝わったと思ったが、他の部分が伝える演奏方法、音の表現が乏しかったと思う。 |
| 即興的演奏に取り入れた、演奏のポイント（①から⑩）について、子どもの表現に感じたこと | <ul style="list-style-type: none"> ② ゆっくりから速く ➡ お散歩から走り回る、台風のような活動がみられた ③④ 速度に音の強弱を合わせて ➡ 寝転んで暴れたり、身体の回転を速く行ったり、台風感がすごく表れていた。 ⑩ イメージの変化 ➡ 身体の動きの変化が明確に起こり、「春から夏かなあ?」「冬の吹雪?」などの言葉が事後子どもたちからも発言があり、その表現のイメージが身体から伝わってきた。 <p>さらに、身体を伏せたり、くねらせたりなど、日常にはない身体の表現から、「怪獣がきた」「地震がきた」などの思いも語っていた。</p> |

| | |
|------------------------------|--|
| <p>全体的な子どもたちの動きについて感じたこと</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・活動前の身体のウォーミングアップは、自由度について自ら動くということ子どもたちが認識できたことが楽しそうだった。 ・場所が保育室では「不満足だ」という意見が子どもたちから出たため、ホールに移動した。すると、身体を伸び伸びと動かす子どもが多くなった。それに合わせ友達と一緒に動いていた子どもが個人で動くなどの変化もあった。 ・普段から感情表現が豊かな子ほど様々な豊かな動きがみられた。そして、戸惑っている子どもも、その子どもたちの様子を見て、連なっていく様子もあった。 ・手本、見本がないと難しいと感じる子どももいたが、回数を重ねていくうちにそれぞれの動きが出てきた。 ・キ. クラス内で発言力のある子、リーダー的な存在である子よりも、今回の活動は普段自分自身を大事にするマイペース的な過ごし方をしている子どもの活動がとても伸び伸びとしていた。 ・保育者からみると難しさが大きい活動と感じていたが、子どもたちの自然な会話の様子を見てみると、「〇〇だったね！」と語り合う姿がとても多くみられた。それらから、とても楽しいということが感じられた。 ・事後の子どもたちからは、「もう一回!」「もっとやりたい!」という声が多く聞こえた。 ・ク. 即興での演奏は不安だったが、やってみると子どもの普段みられない多様な動きを発見し、その子にはみられなかった消極的行動や、積極的な動きなど、これまでの表現活動では出現しないことを感じた。 ・保育者自身でイメージしたことを表現する活動は、不安もあるがそれを楽しむこともできた。 |
|------------------------------|--|

IV-2. ビデオ観察結果について (調査人による分析)

これまでの筆者の調査・研究では、村田¹²⁾の「4つのくずし」を取り入れた筆者(身体表現熟練者高橋)のファシリテートによる即興的身体表現活動調査を行ってきた。今回は、その調査にこれまで3回(1年に1回)経験した保育者たちから、子どもたちの身体表現活動にその経験が含まれる活動を期待し、担任全員が3回経験している五歳児の保育者たちの調査記録を中心として分析していくこととした。

IV-2-1. 保育者(五歳児担任)の即興的演奏の表現について

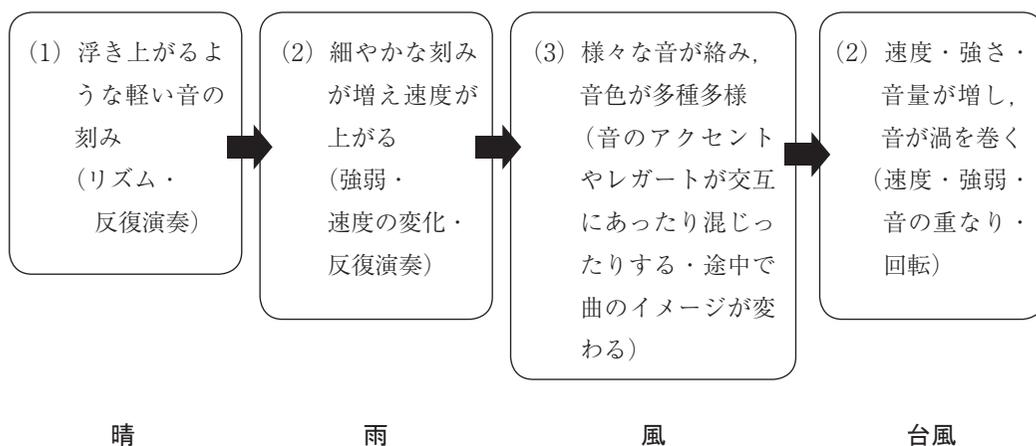
(音楽表現熟練者井中を主としたビデオ分析によるもの)

5歳児では、以下の1. 2. 3. が条件となっており、これらの条件と、演奏したイメージとのテーマの関連性の結果を、[表1]の4つの段階にまとめた。

12) 村田芳子著「リズムから表現へ—2つの入り方・4つのくずし—」『女子体育 第51巻 7・8月号』社団法人日本女子体育連盟, 2009年, pp.24-25.

1. [テーマ]—「天気の変化（晴→雨→風→台風）」—（子どもたちには公表はしない）
2. [使用楽器]・ピアノ・小太鼓・マリンバ・マラカス・大太鼓・鈴・シンバル
・ウッドブロック・ウインドパーチャイム
3. [即興的演奏のポイント]（特に意識して演奏するものについて）
リズム・速度の変化・強弱・音の重なり・反復した演奏・縦と横
（音のアクセントやレガートが交互にあったり、混じったりする）
・途中で曲のイメージが変わる

[表1] 保育者が表現する演奏のイメージ分析について



IV-2-2. 子どもたちの動きについて

（身体表現熟練者高橋を主としたビデオ分析によるもの）

下記の（1）から（4）については、[表1]の関連性を基に、動きと音楽の関連への分析を行った。

(1) 浮き上がるような軽い音の刻み

- ・スキップや軽いジャンプをしながら自分の好きな方向に向かって進んでいく
- ・自分の動きに合わせて友達と手を自然に繋いで一緒に動いていく
- ・片足で跳ねる、手をたたいて弾む、かえるのような後ろ跳び 等々



- (2) 細かやかな刻みが増え速度が上がる
- ・身体をヒラヒラ、ハラハラとくねらせるなどの動き
 - ・左右に手足を小刻みに揺する
 - ・(1)で表現した自分の動きを、さらに震わせたり細かくしたりの動き
 - ・音の響きや高低に合わせて足の動き方が変化する
- 等々



- (3) 様々な音が絡み、音色が多種多様
- ・体の方向を変え、力強くその方向へ突き進む
 - ・途切れる音に一步一步反応して腿を高くあげるなど体の重みを表している
 - ・手の滑らかさや腰のくねりなどを入れて動く
 - ・固まって動いている集団の中を遮って走り抜ける動き
- (4) 速度・強さ・音量が増し、音が渦を巻く
- ・手を大きくあげ跳ね上がったたり、振り上げたりなど
 - ・走りながら寝転んでクルクル回る
 - ・動きの方向を四方八方に広げて大きく動いて回転
 - ・手を繋ぎ、すくんでいる子どもを両際からすくいあげるなどして体を重ねる
 - ・身体を寝かせ固まらせたり、すぐに起き上がり震わせたりを繰り返す
 - ・音が終わりに近づいたことを感じ、全員が音に合わせた自分の動きを緩やかにしたり、最後(終了)を迎えるためのポーズをししたりする準備をしている
- 等々



IV-2-3. 保育者の即興的演奏と子どもの動きについての関連性

IV-2-2. に記載した身体表現熟練者（高橋）を主としたビデオ分析によると、五歳児担任保育者が即興的演奏を行う際に選択した[※即興的演奏のポイント]の要素は、②リズム③速度変化④強弱⑥音の重なり（濃淡）⑧反復⑨縦と横⑩曲のイメージの変化であり、今回の子どもたちの身体の動きには、おおよそ保育者の演奏のイメージが全て表現されていたと観察できた。その要因としては、前回¹³⁾の調査での即興的身体表現で保育者が体験した「4つのくずし」の10項目¹⁴⁾（方向の変化、場の使い方の変化、ねじる、回る、跳ぶ、素早い、ゆっくり、急に止めて、離れたり・くっついたり、潜り抜けたり、一人ではできない動き）に関する動きが、今回の子どもたちの即興的身体表現活動の中に存在しており、その中でも特徴的なものは、以下の[表2]のa～dが映像から観察できている。

今回保育者たちは、これらの要素となるものを自ら即興的演奏の中に取り入れて演奏表現したと考えられる。これらの動きについてを、音によって表現をすることから、子どもたちの身体の動きへの影響を与えたことが発見できたものであった。

[表2]

- | |
|---|
| <p>a. 縦と横の絡み合い➡固まって動いている集団の中を遮って走り抜ける動き</p> <p>b. 変化（方向性）➡体の方向を変え、力強くその方向へ突き進む動き</p> <p>c. 重なり➡手を繋ぎ、すくんでいる友達を両際からすくいあげるなどして身体を重ねていく</p> <p>d. 変化（回転）➡走りながら寝転んでクルクル回る、動きの方向を四方八方に広げて大きく動いて回転</p> |
|---|

V. まとめ

今回の保育者による即興的音楽表現活動は、五歳児の子どもたちの動きが、村田¹⁴⁾の「4つのくずし」の10項目に該当した表現が全て発見されたという結果となった。これは以下についての活動を、これまでの3回の実験調査で五歳児の担任保育者全員が経験していることが、子どもたちへの身体表現に第1に影響を与えたものではないかと考える。[㉗方向の変化①場の使い方の変化②ねじる③回る④跳ぶ⑤素早い⑥ゆっくり⑦急に止めて⑧離れたり、くっついたり、反対にしたり⑨潜り抜けたり、リフトしたり、1人ではできない動き]

特に②, ③, ④, ⑨については、子どもたち自身、又は友達の動きを見ながら周りとの関わりも含めて、自然と表れてきた動きである。これらのことは、保育者が身体から感じた動きを、言葉で説明するのではなく、今回の即興的演奏から子どもたちに伝えることが出来たと捉えることができる。勿論、全ての子どもたちが㉗から⑨の動きを行っているわけではないが、全ての項目に（数の差はあるが）確認できていた。

13) 第74回「日本保育学会保育学会ポスター発表」「創造的表現活動の実践について—保育者による音楽と身体即興的表現活動から—」

14) 村田芳子著「リズムから表現へ—2つの入り方・4つのくずし—」『女子体育 第51巻 7・8月号』社団法人日本女子体育連盟, 2009年, pp.24-25.

また、[表2]のa～dについて、保育者がそのイメージを取り入れて演奏したことが、子どもたちの身体活動に表れていたと感知でき、今回の保育者と子どもたちの自発的表現活動には、音楽（音）と身体活動の相互性があったといえよう。前回の保育者たちの身体表現活動は、村田¹⁴⁾の「4つのくずし」の10項目要素を使用した活動を、ファシリテーター（高橋）によって実践（身体の動きのみの自由な活動）していた。しかし、その際保育者たちには表現しきれなかった項目となっている。今回は、その部分について、保育者たちは、音から子どもに伝えようとしていたことが推察できる。そして、子どもたちの活動に、これらをイメージする身体表現が様々な形で混在していたことは、保育者の音楽と身体による即興的表現活動経験が、子どもたちとの表現を共有し、互いに新たな表現方法を見出したことに大きく影響したと考えられよう。

活動後、子どもたちからは、「もう一回!」「もっとやりたい!」などの声が多く聞こえており、さらに自身の創造性を発揮した主体的な行動を自発的に高めていくことの可能性が期待できると思われる。また、これらは、宮里¹⁵⁾の「主体性の発揮」構想図（宮里2021）の中の「試行錯誤できる雰囲気」「発案を受けとめる大人」「発案を誘う環境」に該当する部分もあり、今回の実践は、子どもの主体性に関連する表現活動への実践的環境であったといえよう。

さらに保育者たちのアンケート記述では、これまでの既成的表現活動への先入観も影響していることを含め、今回の子どもへの即興的演奏に対する不安を抱えた上で、子どもたちの活動に対し新たな発見がいくつかあったことが明記されている。子どもたちも、保育者と同じく身体や音楽の自発的活動の経験値は殆どなく、保育者と子どもの表現への不安は共通項でありながら、表現を互いに共有することのできた自発的活動であったといえる。

音楽は楽譜上で表現内容について記述されており、それを規制的に再現していくための技術を学ぶことを必要とする。身体表現については、動きの表現は指導者などを真似ていくことで、表現できる世界でもある。今回のこの活動は、その規制がなく、子どもの動きに対して制限や範囲などを指摘するものでもない。個々の子どもが何を表現しようとするのか、周りの様子から自分はいかに行動するか、単に真似をしていくことだけではなく、そこから自分らしさをいかに発見していくのかなど、子ども自身が自ら気づき表現していたことを確認することが出来ている。そのため、子どもの活動が止まってしまうたり、友達や保育者を凝視したりするなど、自己表現を考えることに対する静止状態となった子どもがいることも当然であろう。これらの子どもの動向について、保育者は個々の子どもの表現の過程を感知することもでき、保育者の新しい発見に繋がっていくことが考えられた。これは今回のアンケート調査から採取した保育者たちの意見からも確認できており、共通として取り上げられるのが、子どもたちの日頃の様子とは違った部分の発見があったということである。三歳児から五歳児に書かれている「全体的な子どもたちの動きについて感じたこと」の「ア・イ・ウ・エ・オ・キ・ク」の部分、日頃の保育では感じることはない子どもたちの姿が表記されている。集団での既成的行動の中では、保育者が個々の子どもの特徴や性質を特定してしま

15) 宮里暁美著「やりたい!」が発揮される生活を目指して『日本保育学会会報第182号』2022年1月4日、pp.4 - 5.

うことがある。しかし今回の即興的表現活動は、それぞれが創造性を持って主体性に繋がる活動を展開できたものであったといえよう。

さらに、五歳児の「保育者の即興的演奏について感じたこと」へのコメント「カ」については、これまで、即興的表現活動を3回の調査で経験してきた保育者同士が年長児全クラスに存在していたことから、即興的演奏で保育者同士の表現を認め合い、それを相互的に有効活用していたことが取り上げられていた。これらは、保育者自身、身体と音楽による主体的活動への理解と有効性について共有できていたことも読み取ることができるであろう。

これらのことから、表現活動の根底として、保育者自身が多様性のある自発的表現活動経験を持つことは、子どもたちそれぞれの表現活動への検知力を高めていくことに繋がるものとなるはずである。そして、子どもたちの主体的活動が、幼児期であるからこそ実践すべき「身体表現」「音楽表現」として、「生きる力」を促すための表現活動方法を探求すべきであると考え。今後は、その具体的方法論への調査として、子どもたち同士による音楽と身体への即興的表現活動を調査・研究し、その精緻化に努めたい。

<謝辞>ご協力いただいたM幼稚園の教員の方々と園児の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- Bowman, Wayne. "Cognition and the Body: Perspectives from Music Education." in Liora Bresler (ed.), *Knowing Bodies, Moving Minds: Towards Embodied Teaching and Learning*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers, 2004, pp.29–50.
- Turino, Thomas. *Music as Social Life: The Politics of Participation*. University of Chicago Press, 2008.
- Thomas, Helen. *The Body, Dance and Cultural Theory*. London and New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- 中川華那・片山美香著「音楽による幼児の表現活動と保育者の援助に関する研究—一人とかかわる力を育むために—」『岡山大学教師教育開発センター紀要 第5号』2015年, pp.73–82.
- 倉原弘子・長 涼子著「幼児の主体的な表現活動に関する一考察—雨をテーマとしたプロジェクトに着目して—」『中村学園大学発達支援センター研究紀要 第10号』2019年, pp.39–46.
- 岡田暁生・伊東信宏・近藤秀樹 他 著『ピアノを弾く身体』春秋社 2003年.
- 無藤 隆著『幼児教育のデザイン 保育の生態学』東京大学出版社 2013年.
- 無藤 隆・汐見稔幸・大豆田啓友著『3法令から読み解く乳児の教育・保育の未来』中央法規出版 2018年.